

春燈

十一月号

11

November 2008



久保田万太郎の句

まゆ玉のしだれひそかにもつれけり

『流寓抄以後』昭和三十六年

久保田家では、毎年大晦日に歌舞伎小道具さんの好意で、紅白の繭玉が飾りつけられ、華やかさの中に来る年をことほいでいた。師のまゆ玉の句は、この句集だけでも十二句と多い。

掲句は“ひそかに”を挟んで“しだれ”と“もつれ”を配し、淑気をそれとなく醸し出している点が出色であり、“ひそかに”に孤独が感じ取られます。

小菅 礼子

久保田万太郎の句

親一人子一人螢光りけり

『草の丈』昭和二十七年

戦時下、長男耕一が召集された。その出征に際して詠まれた句だ。〃ひとりのリフレーションが、静かで哀しい。一人と一人の命が蛍の光に寂しく投影されている。独りずつ灯る命の光は明るくない。明滅しながら飛ぶ蛍は、親も一人、子も一人と闇に消え去る。光とは涙なのだ。気がつけば夜露にぬれている自分という独りの闇の匂い。孤影が闇の中に鎮まる。

佐々木良玄

主宰の句

安立公彦

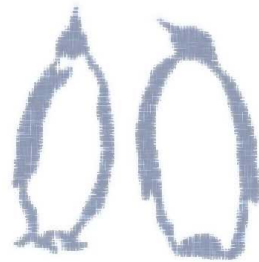
土用芽に柑橘の香の立つあはれ

呼びあひしことなき吾子に門火焚く

秋風や真間の継橋二歩に越ゆ

新涼の面吹かるる露坐仏

早稲刈つて真砂女の海を近うせり



佐 渡

久保 久子

秋麗や藍を深める日本海
盃舟たらひの底の秋の声
浜焼の烏賊の香りの虜かな
海鳴りの重なる島や夕芒
大入日海が呑みこむ送り盆
老松を夕日が照らす世阿弥の忌
中将の面の翳りや遠砧
増面の口ボツト能や秋ともし
漁火の沖の賑はひ流れ星
天領の佐渡金山や天高し

身辺雑吟

陳 錫 恭

霧の夜の妻帰ります流しもと
母の日や母の手書きの一茶の句
停電の夜の只管打坐遠蛙
遥かなる記憶人ごみにシヤネル五番
聞こえ来るビオロンの音や落葉風
村芝居黛玉ほんに泣きにけり
古書店にひそむ「むかし」や秋入日
ダブルスの雁行陣や鳥渡る
三日月に祈る安けき夢の夜を
西行のかこち涙や雨の月

当月集

安立 公彦選



○ 中嶋 昌子

白シャツを粋に着こなし若からず
噴水は天まで原爆慰霊祭
ふるさとの空に雲湧き休暇果つ
日曜の稲刈り真赤なコンバイン
子が来るはいつも稲穂の垂るる頃

○ 棗 怜子

秋の蚊の逃ぐるに見するしたたかさ
菊膳大往生の母なりし
温め酒いつか大きくなる話
秋日傘まだ続きある立ち話
秋暑し女をんなの劇場前

○ 松田 千枝

折鶴の尾羽色褪せ放生会
外郎を口に含みし残暑かな
秋旱松の走り根うねり見ゆ
梨剥くや話ひととき置きしまま
山国の山の匂ひや星月夜

○ 久本 久美子

思ひきり雲が絵をかく秋の天
ニコライの鐘は色なき風に乗
一灯をアイコンに献じ秋涼し
聖木てふ実生の楷樹天高し
爽籟や思索にふける孔子像

○ 寺尾 エツ子

青田中「秋田小町」は穂に出づる
仕合せと気付かぬ日々の夕端居
仏前に供へ自作の大西瓜
大安と知りて巢立つか軒燕
熱帯夜水枕して寝てもみつ

春燈の句

安立 公彦選

処暑過ぎの雨の日つづく家居かな

東京 本田 保

坂の上に雲生れ子規の忌なりけり

梶の葉に想ひの丈を託しけり

冷やかに口きく事もなかりけり

美しき雲を見てをり夏の果て

盆僧のわき目も振らぬ歩みかな

夏の灯や教師付添ふ児童劇

蟬鳴いて道路補修の人の影

暑に耐へて生きる証の米をとぐ

市民病院前どつと人吐くバス残暑

夾竹桃の咲き継ぐ中を退院す

若かりし母の行年夏椿

千貫神輿の台輪四尺晩夏光（神田明神二句）

東京 後藤眞由美

秋思添ふ将門彫りし妙見像

「不朽体」てふ聖人の骨秋さやか（ニコライ堂）

秋騒雨鬼籠子伏する降棟（湯島聖堂）

隣り家へ抜ける近道茗荷の子

猫の頭を撫でて去りゆく盆の僧

生身魂飴ひとつにもありがたし

地藏会の小さき明りや村はずれ

手になづる背割り柱や秋の声（島崎藤村）

藤村の姉住む萩の四ツ目垣

閉ざされし藤村旧居軒忍

終焉の座敷の窓や秋の風

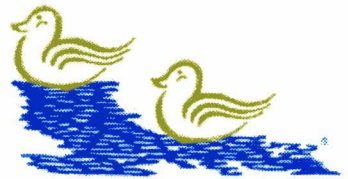
病むひとの蒼き闘志やつつくし

耳とほくなりてさやかや秋の声

神奈川 金子 輝

東京 豊谷 青峰

愛知 水島とみ子



余言

安立公彦

山国の山の句ひや星月夜

松田 千枝

星月夜、いい言葉だ。こういう言葉を季語とした先人の感性を誇りに思う。その星月夜の下の世界は山あいの村落だろう。山の句いと星明りが心の安らぎを呼び戻す。山国の、山の、のリフレインも心地よい。

秋の暮優しき目もて遺影笑む

桑原美津子

一灯をアイコンに献じ秋涼し

久本久美子

ニコライ堂での作。普通にニコライ堂と呼んでいるが、正しくは日本ハリスト正教会復活大聖堂と辞書にはある。明治二十四年に建立、関東大震災で被災し、現在の建物は昭和四年に再建されたという。アイコンはギリシア教会で礼拝の対象とした聖画像。

ニコライ堂は周辺のどの地から眺めても気持ちの通い合う建物だ。それは建物の主体をなすドームの異国情緒のみならず、それを越えたもつと内面的なものから来ている。しかし一步教会の中に踏み入ると、外観の親しみは宗教建築の持つ荘重さに一変する。

この句、上五中七の教会内部での描写と、下五に見られる外観のさわやかさが見ごとに融合している。

この五句一連の句を見ながら、私は斎藤茂吉の「死にたまふ母」を思い出していた。

死に近い夫の命の終焉を、一縷の望みを抱きつつも、目の現実を正しく描写している。「優しき目もて」が浮いていない。この中七により、亡き夫も、作者も、そしてこの句を見る私たちも救われる。

桑原さんへの「余言」はここまでとし、以下、この欄をお借りして悼句についての考えを申し述べたい。

身近な人の不幸は、その人にとっては最大の悲しみだ。しかしそのことを作品として第三者の前に公表する場合、作者の悲しみが歎きのみに終始しては、読む人は同情はするが俳句作品として受け入れることは出来ない。悲しみが作者の中で俳句という価値あるものに昇華してこそ、その句は読む人の心を打つ作品となり得る。

むつかしいことだが、感情を整理して、その上なるべ

く具体的に表わすことが大切だ。「死にたまふ母」は、短歌俳句の枠を越えた悼詞の古典だ。一読をお薦めしたい。

陶風鈴からんと一つ売れ残る 佐藤 秀

「陶風鈴からんと一つ」は吊された風鈴の姿である。そう思った瞬間、「売れ残る」で大逆転されたことに気づく。中七は売れ残った陶風鈴の呼び声でもある。

俳句は抒情だけでは生き延びることは出来ない。作品がかもす作者の意図しないおかしみ、即ち滑稽さと相俟つてこそ後世に伝えられ得るものである。しかし何れの場合であつても守るべきは、「心の作はよし、詞の作は好むべからず」という芭蕉の言葉「三冊子」である。

小兵なる吾子の背中や蔓たぐり 三代川玲子

「蔓たぐり」とは聞きなれない季語だ。歳時記の中には収録されていないものもある。日本大歳時記には例句一句とともに次のような解説がついている。

収穫期をすぎて、成長のとまった瓜類・豆などの枯蔓を手繰り抜くこと。(略) このことに関連して、大勢いる子供の

中で、特に未っ子のことを言うこともある。

この解説を読むと、この句は良く分る。
今年わが家のゴーヤは実つきが悪かった。植え時が遅かつ

たせいもある。そろそろ伸び切った蔓を棚から抜かなくてはならない。そうだこれも「蔓たぐり」となるか。ミニ菜園の作業に、季語を味わう愉しみが一つふえた。

坂の上に雲生れ子規の忌なりけり 本田 保

多くの愛読者に惜しまれつつ、司馬遼太郎が逝つたのは平成八年だった。没後十二年経つてもその著書は読まれ続けていると聞く。膨大な作品の中の一つ、『坂の上の雲』は、日本というこの極東の一小国が、旧藩士の力を結集させて、大國ロシアの艦隊を壊滅させるというストーリーだが、その中に登場する正岡子規の存在は印象深い。

司馬遼太郎は、『日本語の本質』という対話選集の中で、芭蕉と子規を対比し、芭蕉は漢籍を基本に置いた「ますらおぶり」の俳人で、子規は非常にしなやかなものを表現するのに適した「たおやめぶり」の詩人だったと言っている。漢文はレンガを積むような、レンガ一つ外したら意味が通じなくなるような論理性を持つ。日本語は「いまから銀座にゆき」まで、結末が分らない。「ます」とつくか「ません」とつくかで逆転する。と、日本語と漢文の本質を述べて、ごく大ざっぱに芭蕉と子規の違いを説いている。

この句、子規忌を小説『坂の上の雲』と一体化しているのが、今までの子規忌の句と異なる。正岡子規の力強い聲音が聞えてくるような一句だ。ちなみに子規の生年は一八六七年。同年生れに、漱石、露伴、紅葉がいる。